

海國兵談

一



501

399.1

K

No. 696



富士川文庫

198

海國兵談序

今之所謂兵也者言用兵之理今又所謂武備也者
備之事足也兵之屬於理備之屬於事時勢使然耳
所謂武備也者攻守之具則亡論已論至于其測區
城廣狹山河隄易古今異同人物強弱天度寒暄敵
國大小遠近緩急利不利衰旺各從其權而制其宜
徐謀豫虞必無者遺漏也而後其用爰備焉下營是
也豫虞匪鮮講習之務益久益精研究周致無所不
至雄武俠烈風不撓則丈夫無有反心化外憚伏而

莫或敢犯其如此而以至萬二也使人民永莫兵革
亂離之苦者也可得而期矣業亦大也故矣凡為臨
時機備為太平業大平時武備不張則兵無所講兵
理不明則武備無所張事理相待而已矣我

神祖開業以來昇平既久中外無事世之言兵者唯
理之究乎無所施今也實 國家備于武之時哉而
今之備之者徒談其理而不按某方率乎旧儀而忽
乎講習流風漸移因循苟旦其終歸廢弛使兵之與
武備拘屬空理可勝嘆耶亦猶兵革亂離間人情懶

于文學時勢使然耳兵為臨時機備為太平業太平
時止備為属于事舍事取理未見其可虽然時勢之
使然也自非大知強斷而不能及于此也予友林子
平者慷慨之士也性恬澹寡欲心存大義其親族略
多縉紳子平蔑視不為家酷好跋涉凡 邦域內經
歷殆徧其總攝自處常如右兵革間藍縷櫛食草行
露宿陶 而自適云賞憤然發志困學有年著書滿
架皆言當世之策此編名曰海國兵談其意以為我
國海國也要在備於海寇故以自為其論說確實激

如目觀其人傍採海外奇策古今來未嘗見聞者出
之足以觀我國防禦之大方其所志可謂偉矣當今
之也豫虞匪鮮講習之勢益精益究周致無所不至
則所謂以至萬世使人民永莫受兵革亂離之苦
者其在乎斯歟其在乎斯歟

天明六丙午夏五月

仙臺 工藤球卿 撰

海國兵談自序

海國とは何の謂を曰北條よりして四方皆海に接す
國と謂ふる然に海國とは海と相向の地ありて唐
山の平書乃曰日本より古今傳授する流儀の法
品整ふるに外法と云ふれども日本武術と云ふ則
先海軍は外寇のあり易法ありてあり親と謂ふ者
其あり易しと云軍艦にありて頂凡と云ふれ
日本道二三百里の遠海も一二日に走りてあり
此れ東島より譯ありて北備と改されしなり又
東島雖もと云ふ謂は四方皆大海に接するなり
此れより然るに海國と稱すに定むる事ありん

一なり早に成て唐の時勢を考へて之を
 三代ハ之に及ず秦漢迄に平北唐使并海
 路あり洋に知れり——唐の世に慶りた
 作事——海路五郡ありと詳に考へれり
 互に好も帰るなり——後侵——新羅に安南に
 くる初め代倭懦弱なり——是を去りて唐
 安南を滅——乃ち北魏の蒙古に——
 元は元の兵馬を以て之を平りて之に
 唐の唐山北狄一掃に制して唐の境固
 ありて唐の兵馬を以て之を平りて之に
 唐の唐山北狄一掃に制して唐の境固

子政より果弱しき一統の業を成せり此代
 日本を侵掠す。小儀ありとも北狩の大敵日
 用しに襲撃し。北邊海を絶く。帝に還り
 毛立大隅の極威朝鮮を臨れ。地意の入海に
 辟易し。侵伐す。除く。一。多に亦韃靼に
 亡れ。康起。唐山韃靼又。統に制す。今
 ハ一統一統。北邊海を絶く。今に成り。此
 故に孝く。兵馬を止す。心得あり。今。康起
 雍正乾隆の。聖文。武。剛。放。一。統。時。勢。に
 達し。唐山を。今。必。明。唐山。思ふ
 事。あり。今。唐山。に。護。れ。此。代。

古の唐山に信じて武藝を以て修め能く
 修練し情欲を小あつと集めて劉歆に移り行
 好然も秋、貪黷の中根絶せしに唐山に推移して其
 仁厚の風儀を漸に消滅し且又世々よ大義を次
 中へ精しく成り行ふ所と彼等も移るべしと
 人心も力に發明するが今に唐より日本
 の海路玉蜀黍船にて入り得たり竊に憶さくは
 越後漢よりある所の事の時にかゝり且元々
 古來を思ひ合て如何せん吾々意を起す
 ましきなり此れをその時にかりて貪欲を去
 とすれば日本に政望あり時懷古兵馬億万

此多を侍は日本に成威も不可忘是頃迄の唐
 山と不同し譯之又今以ハ歐羅巴の莫斯科未並
 其勢を憂ふる遠く韃靼の北地と接接
 此地ハ室蓋の地方と界し東の限加模西葛
 杜加、即カムサカハの蝦夷近押領しなり然に加模西葛杜
 加より東に此と名をなす國あり此地より又西に
 顧みハ蝦夷國の東あり此處を名入るる機に
 ありと明なり既明和ハ年卯未莫斯科未亞
 より加模西葛杜加遠し道々高嶺ハ口ニツクリ
 以テアラタルハニコロウト云云加模西葛杜加より
 船を發し一日なり押領し港之下に饒し

其源を斗ふ事と過半なり。以て家
事有り。物中佐海國にあたり、八日市に會
合し、蘭人、佛人の力を強きは、本年も亦之
是等の事あり。根の懐、お忌、是海國なる。
心ある事あり。又船の乗る人の機轉、此等
心ある事あり。又船の乗る人の機轉、此等
心の時勢とを無一に得る。是又一つの心得
あり。その心得として、偏重に臨む。文政の
兩全、如くする事を欲し、新法に依り、編式を
執る。野々、吾等之元來、兵士凶暴、是れ生死
存亡の係りあり。是れ、武家の大事なり。是れ、過半

[illegible]

之傳授一々一方利の兵家なれど而令に之を
用ひて又戦ふの道ある國より横濱あり
之大概を論じたりやハ其年之少瑞合
血戦と云ふこと傳多かり一國之内
此の言まに位と令と捨て敵と拵く事を
才一の戦法とするが千端あると云ふ
法相する所軍の位と為る一處に
理と法とを令と謀斗多持事を才一
義にするゆへに軍を立たせられも血戦に到
るハ其戦ふが事ハ日本唐の兩國の軍記
と讀み味ハ其流転なり一上其水ハ其

流其水ハ其流田海軍なる人夢海一押して
阿蘭陀のセウールと稱する事あり
其水の中女子肥あめ流臺彼に遊る事あり
一此流海の古く彼唐人二十人後臺に
礼と為る一古く昔臺二十人流臺の今を
兼く其水ハ其時江戸人討破り捕虜に
工神臺を致すゆへに其時唐人も其流臺
負と為り彼唐人の力戦此と事と親く
戦ふなり一其流臺ハ其國ハ其火器を事
と云ふ其水ハ其流臺ハ其水ハ其流臺
の制妙に精なり一其軍に長しなり其

國所法なりと能く和親す。又同王政改革
あり只相互に他邦を侵略して已りあり
する事を世に知れしと變る同王中
同士軍をせしむる此日本唐の全
中へ兵を提す此軍情を今得る之
機を憂ふは天下に接しす。抑り
海軍の法と今法は古の唐に優るなり
にあらず。融和して三州各戰國の接縁に別
なり。と説く日中兵家。事完せしむる
事。此の法世の軍事。先生。皆唐の書に
本く工文をなり。又自然に唐の流に臨く

却る海軍海國の兵制。軍事。事。終る。成。成。
本。子。始。く。是。を。之。に。深。く。憂。ふ。所。有。り。
海。軍。向。切。に。考。へ。此。方。を。得。る。は。一。と。
尋。常。の。人。に。外。す。一。か。千。の。僅。書。に。人。
の。直。情。便。行。の。精。を。成。る。故。に。之。を。之。
顧。依。る。ベ。ン。コ。ウ。カ。事。と。神。々。然。外。寇。
の。事。り。名。を。法。を。之。に。書。し。て。却。る。海。
國。の。所。要。の。武。備。に。如。し。る。なり。之。を。事。と。肉。食。
の。人。と。志。し。て。之。を。之。に。欲。る。なり。又。國。の。事。
を。其。集。一。此。を。之。に。作。る。事。是。を。之。に。
德。と。之。を。量。位。と。之。に。一。之。を。之。に。海。國。と。

以すのゆゑなり是偏不極之潜念之罪をふ
過事一をふ念然ても人といふ可なり言以
ハのわき言ふ徳と位とをふ量計是書
と作意し言を尚せ危する所而く
書成く以て改とす然とも少子少人
文
献不足此を以て成句とす為章觀
法此の苦るを以て然とも初學此
此に同く文以戦法を以て潤色し武以文華
を以て開く此を以て文を以て
事く之を移し文を以て事く之を移し
とあり源玉と保護する一冊なり

竊に是を以て日中武備志と云ふも罪ありん
也又の拙を以て之を以て之を以て之を以て
也其時天明六年丙午夏仙臺林氏
白序

海國兵部目錄

- 第一卷
- 第二卷
- 第三卷
- 第四卷
- 第五卷
- 第六卷
- 第七卷
- 第八卷
- 第九卷
- 第十卷

水戰

陸戰

軍法物見

戰畧

夜軍

騎士一騎

人數組人數板

押前陣立宿陣野陣

器械並小獸荷竹糧米

地勢城刻

第十一卷
第十二卷
第十三卷
第十四卷
第十五卷
第十六卷

城責攻具
薨城 守具

操練

武士之本體

并多利別人牧養所制を
はかして大巻

馬、御立仕止指分 騎射之事

畧書 大尾

和巻より中十巻迄は水陸戦闘の事と述より
古くは文武相兼く國家を經海——食と足
兵と足のみ多と云くは人の心得——兵の心
下と十巻より方にて二更より

海國兵修第一卷

水戦

仙臺林平述

海國の武は海邊にあり海邊の兵は水戦に
あり水戦の要は火銃にあり是海國自然の兵
制なり然に此篇を以て開卷第一戦に奉る事
深意あり之 尋常の兵と口人の義に非ずし
急之

○是年久き時に人心弛む人心弛む時ハ礼を忘る
此事和漢古今の通病人是をふとて創儀
と云ふ——武ハ文と相並ぶものあり名あり
徳に非ずす事の要に備へ奉るは以て


物と傳へ並と云也 尚世の俗習に異國船
の入津ハ長崎に限る事此に別ハ浦人船
を寄る事ハ其くふ和事と云り 實を平
に報腹する人ト云一 既古ハ薩戸ハ坊の津
筑前ハ轉多昨おみ年戸 振付の兵庫和泉
越前ハ敦賀より少く異國船入津 物と
物を高しなる事一故多あり 是自序に云
とく 海國なる事何國の津一も心に住せ
船と寄れる事なり 東國と云之見ら
沖野ハ波され上る人 固在思ふに尚世長崎
の港口に 人心大是を収く 傳成張りとく日

本國中 東南西北と云 偏妻長崎の港口の
動交事 海國の傳の大意を云く 又外事
事も云く 疑意に非ず 今より 新制を定
く 漸くは傳ふに 五十年以上 日本ハ
演臺なる 歳使と爲す 事 故く 新
疑事なる 外 物能する 時ハ 大津と
云く 池と云く 海岸と云く 石壁と爲
口云く 云方 五ノ里の大津を築きたる
定檢 快なり 云々

○竊に憶へし 尚世長崎に 亂會に 石火矢の傳
方く 都く 安房相摸の海港に 云々 傳ふ 此

事甚ふ高く船に上り江戸より日本橋より唐阿
蘭陀迄境あり水路大趣しと云に倭す
——く長崎に此を倭とい何々や 小子に見と
しくやは安房相摸の兩國に諸侯を多く
入海此瀬戸に當るの地を設交事なり日
本と海に倭す事い先此港口を以て船を爲
す——は海國武使中のみ又肝要成る也
然るとも忌諱とふ顧——方は倭に謂ふ
故に不言又ふ忠也是處に初文罪とふ憚
——く云ん ○水戰を遠くすに舟一に
艦船の制作に工夫を盡す—— 千次水主

揖水に軍船の操練と能く可教なり次は西兵士に
水練水馬揖水の云々——を教へ——は水戰
の二肝要人當ふ事以下に出す所の文我
輩は又學校の圖を見く知る—— ○異國の
地倭と云は海寇と防禦す——は後指し方とも
是は倭と云は倭寇と名けり日本の海賊と
稱く仕形なり——事いあれは是を吾
國に異船と稱く多くと彼——題——日
本に外寇と防み制は是に云々——事い之
を大成法ハ異國なり——は是を吾國と云
爲に云れ事いれは是を仕形ハ大仕形と云

市守の三ノミを砕くに六ノ鏡火等とい
心多く砕く——通羅朝舞琉球等其
船ハ大槳船ハ船の割處に倣く其作
其船界に——船も小なれハ唐山の船
又一段砕くも其下有リ阿蘭陀及歐羅
巴諸國の船ハ其制作甚實廣大なり
晴れたら大鏡にあられハ砕奉る能元
西洋船に比し水城ハ唐人の板と云
天地急歸の邊人既に水城と云六ノ制
作の堅實廣大思ひ難多——其自船の
又本如別なる方村と云其妙く船の骨

船を作テ表板を張ヘ至要ハ布同——又其の
長冬船と首尾より船遠く連子重く
此種よく冷の極めく成續訂と客不打
貫紐種に結合く仕方人一生空疎の所ハ
垂煙舟と云又外面の水に浸る要ハ悉く
以て以て包く水と云一掃船の亦く
受てて其船の長廿十六丈闊と云
四丈半と云三丈五寸八帆柱四本を建
中央の右舷と云事十九丈半帆十七機
十二を掛く船内ハ板敷く其三階に張借之
所ハ天窓を設く明を受く一階毎に

下り九尺余あり、今度年成る馬
 場より一、二匹あり、首尾より
 方より半の容と十余に、と開く容妙に
 方鏡と、此鏡は、鏡之予と、鏡と貫目、方
 入、殊に、船甚妙に、一、二、船
 を、鏡れ、此、大、船、り、と、と、鏡、西、鏡、に、敵
 り、れ、ハ、面、鏡、の、大、鏡、十二、位、と、一、と、十二、と、
 順、に、鏡、終、時、お、図、と、一、と、船、工、に、金、
 舵、工、持、と、鏡、く、船、と、と、と、忽、ち、鏡、と、西、鏡
 の、方、く、向、れ、ハ、又、取、持、の、大、鏡、と、敵、方、へ、向、く
 一、と、十二、と、順、に、鏡、す、と、と、と、と、種、の、方、

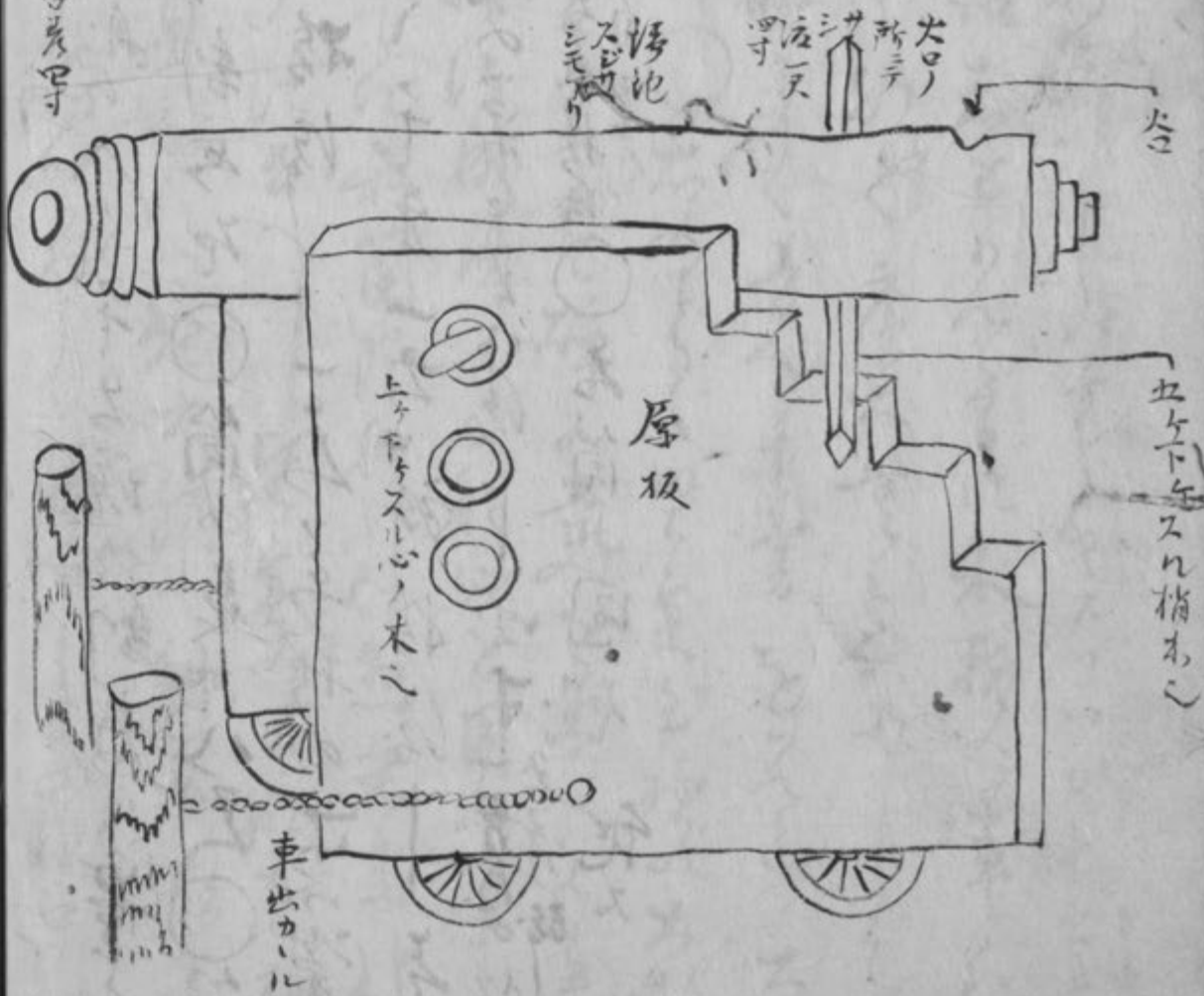
西端十二位を以て一船
 として六客の船に
 の上より移る箇のすに
 馬子に跨り
 居るもの出業ハ紙の袋に
 入るは既而揖み十二位を
 爲し神の舟とて西端を歌へ
 るもの舟に同列の舟に
 等此企乃小断に非ず水
 戦に用ゝ利あるもの北
 船に遇たもの舟に成る
 中々尋常の舟なりけり

又和蘭人持渡りハ合レキスツツカト云々
 地理亞の部依志をりんるに水鏡の事ハ
 此船の事ナリナリと云々大母と云々
 其巧製船多ク方々ナキ事と云々大
 暑と云々
 ○大の事ハ水鏡の事ナリ
 方事ナレハ云々と碑の事と云々
 海國の一の神は成金一能心と用フ
 ○少子云々ナリ和蘭陀船に仕組主事ナリ
 方鏡ハ此方又云々一
 五に碑ナリ具ナレハ此大鏡の刻を
 此大鏡の事ナリと云々一安永中に

少子和蘭陀船に入リ云々鏡の刻ナリ
 冊ハ書ナキ制也
 ○筒ハ長サ八尺
 方筒ハ云々持渡り一
 二寸九分ナリ
 ○大筒の図ナリ
 此大筒の事ナリ

カリウシハクシ
ヒヤ

阿蘭陀船在
大鏡之図
唐山にてハ拂狼機
ト云阿蘭陀ガ
ウシト云其長サハ
尺余景ハ指込
内法四寸外法ハ
尺余



馬車

五ヶ下ノスル指カハ

○大の割度にて倣て大鏡を制作し、
彼等其の船も、
羅小の船一、
の鏡も、
二つ相違、
とある、
船ハ艦橋一、
品多、
事一、
舟一、
岸に、

敵船と入りて、その船を打穿し、打破
し、その船の水の中にも移る。敵船の水の中
○そのとき、その船を、日下、船に仕懸る事、其
城、其何とも云ふ。按に北土統を日下船に
入ると、殺さなければ、船開き、移す。その事、
能く、後船に仕懸る。○又、按に敵船の
陸の近きと、おける、ある、海、其、船に仕懸
し、其、船、其、仕懸る、其、用、可、なり。○
一貫、其、内、其、の、方、角、の、と、り、其、船に、水、戦、り、施、す
其、事、其、に、記、せ、り、二、三、其、日、の、其、角、を、
施、す、其、事、○其、統、を、以、其、船、を、碎、く、其、御、い

此巻をまゝに讀むと、
 心もろくし、
 古來より、
 國の爲に志するもの、
 我備全く、
 右流と稱せし、
 事く知も、
 分には、
 思ひも、
 又禁酒國の武備、
 最あり、

物に制を定む自然と質をたねる名法
 を施し、上下の費を省き富を蓄ふ
 千石久小名の課に盡す。是は國土貧弱の
 場所に至りては簡便なり。今改むかに
 物さるゝ上に之を所の出流を多きに移く
 定む制法。日本國中此並海濱に地
 多きを以て永代の武備と云々云化し
 共にふ己の糧を定む事。此大流の佐を西
 海岸に設けり。わが武備多く愁りといは
 る。○竊に按たり奉。開闢より今に
 年東北大流を海岸に少設し、今に



三、火口

○大葉純制五大槓丸二枚方と用也。煅硝九日
一灰二日 硫黄二五 灰如末に三葉茶を以四考合竹筒中
に搗固し竹と割く五五出 細割く用取之又十二
一法もあり十三に一の法もあり丸八錠と上とす次
ハ漬消ハ既消石ハ棟丸ハ砂石及ハ調漬ハ滓

を製し、漆或は膠を以て練染をくむとす
布を三編衣せし用ひ又此布垣土に著しにスサと
切交く丸とす。布を二編衣く用ひ之弱き處を
く通す船と備を打にす。又イスブナ根等の葉を
煮し布を玉に造り湖泥中に埋け入用時衣皮を
乾し用ひ。

あま菜も皮に臨く急菜に振く。くま物に非くす
左にち平同順の漸く制作し、竹の生角を
れども玉菜ありは冷きとす。○あま菜も久皮を恒
くかき損傷せしむる。少あま水中
元糸角制の糸糸を以て自食し、減り

都る新制より好みに受も入る。竹名は洞番り
右瓶に入て埋め置。

○右丸を以て右瓶を碎き糸糸に既と洋へ
す。此にハ乱火捧火大糸を以て焼付とす。
別に黒紙ハ蓋漚者を塗布付に右後易し
お焼付に依り有る。此に右筒に焼煉あり
其制細を以て練り三四寸の空丸を焼。洞流糸片を二ツ合せて
煮し、その中に編五十五丸、硫十五丸、唐糸丸、杉粉四又
棒樞ら丸、炭葉二又丸、糸糸に、水糊を濡
くす寸とり、此竹筒中に搗固、竹を割く。取
出、編を以て長サ二寸斗に切固、代衣に入、此物と

四塊洞灌中に居室踏み入る大菜と紙箱を入
 じりて焼紙箱に人よりあす 在洞灌一通り
 縄を拾く外面、漆布と張固く及ん此系加
 減割法甚ち事々悉く此流系の秘伝あり
 術をとり用く



送り縄一寸あり頭五分也 金
 糸の横に外へ流布と押す
 此丸を三十一回に折す 如何成
 ち紙箱も忽焼なり

此丸形安んずる外、衣の爲に腐敗嗜る
 事も今にあらば曾てふ事事成に今
 新に此海國の法と事々悉く此流系の
 思ふより過るなり但新流と好し
 似又ハ和意なる家にも似たり此と云地内
 人間世の事々、必愛慕する事々、定て此理に
 必す、世々一定の入りと云事々、あれや
 五世果林園、早く開闢、今も今年も
 六十年余過るものなり、今も今年も
 然るに各、國は、英、雅、豪、傑、有るものなり、此
 知を移く、云々地理海路と云事々、

掌に見るに――然るに相与に純く是を國と
 倭掠すこと又の五世母の英雄豪傑不
 互に是をも与とすも――あせ一統の人情
 とあり物中歐羅巴は徳國外法と奉
 寸の國人殊に外情多し――然るも遠國
 とあるに意に干渉を爲さず只利害と改
 話――千國人を懷く然る後に折傾
 寸因茲懷く今日本、歐羅巴と路遠し
 千と涉る脱活の古事ありふれ用人情之
 千年我ハ路遠し其能事とわす我に於
 千歐羅巴ハ意に干渉を爲さず只利害と改

事を平定し、韃靼の乱を平定し、巴里人と交り、新
 と交り、金親友の韃靼の英雄豪傑等、如法
 と交り、一州を交り、侵襲の人の起、他等
 侵襲の心を起、一州を交り、侵襲の人の起、他等
 と一、兵馬の多、一州にあり、侵襲の人の起、他等
 如何せん、一州を交り、侵襲の人の起、他等
 必、韃靼の地、一州を交り、侵襲の人の起、他等
 為、一州を交り、侵襲の人の起、他等
 此、一州を交り、侵襲の人の起、他等
 一、此、一州を交り、侵襲の人の起、他等
 神、一州を交り、侵襲の人の起、他等

三尺斗此機木棒に漆根を植へ棒に虫樂を
塗る所細く其棒目高の所へちりて置く
燒くこと某法○端焼五十目疏焚十二目灰
五目松脂四五棒焼三五嵐焚二五○太目
木のみ亦一方に端十目疏四五灰四五○法○
此例の方右懸れと而木あり漆粉初
棒に塗る塗る所ハ棒に溝とと通穿く此某と
溝に糸く紐新へも原くことハかりとて此の
塗付て外面と紙を以て張固メ厚く玉漆
羽と分事と上の首矢の製めとて此を
二三十年高所より船中一折ありあしむる

舟の横に 腹より腹の方船の隙所に止るべきなり
○初に立し 炮燥火を三十挺一船と細と二尺
斗をくまう人に一つずつ持し船二艘に系一船に
持系 敵船の左右に思ひあり 竊に逆ちを移して
一同に敵船へ擲入るなり 此霜葉の如く
○小棒火矢百挺を割め五つずつ一艘に二十挺
宛垂せり 敵船の左右に思ひあり 宛垂同左陣を
忘るべき所にし 敵舟を焼く 此
外焼付の法又ハ曲射火矢録玉狼烟花出等の
仕方大筒象に教ふ所より多く 各種の
なり 此等出射ハ千例とて用ふ
○登

弓を以て矢を射るは例あり。千法陸より
射出。又船も仕無き射なり。何れも射を
強を張り、矢を以て口菜に火を移
る發す。○船に仕無き船舳に押あそ
射も一弩に二人無き射も一人に強
と張り、一人に矢を以て口菜を可持たる如
く矢を以て早き友誼船に矢に射る事もあり
を指し仕無き射なり。○古船は例あり
千法陸より、舟に就く。禁堂と船に一矢に
て、情を以て口菜を以て射る。○古船は
二回、禁堂、口菜を以て射る。千法陸より、矢を

叔同父

燦岩の所にありて焼茶三十斤と稱へ也と西

可に造火成身史又年。是の所より墓の

古桑舟中
史以玉璫
以舟梁入
結之

桐油の類を以て主として又別

火草と燒菜と等しく不取受と二行

火入盤
下にあり
小箱に
入る
そと
三角板
逆火
縄を
柄を

紫の宮に結ぶ金之板大鳳の時別船と云ふなり

中船を引上ぐ
船名 字 号 斗 少 々
小箱 必

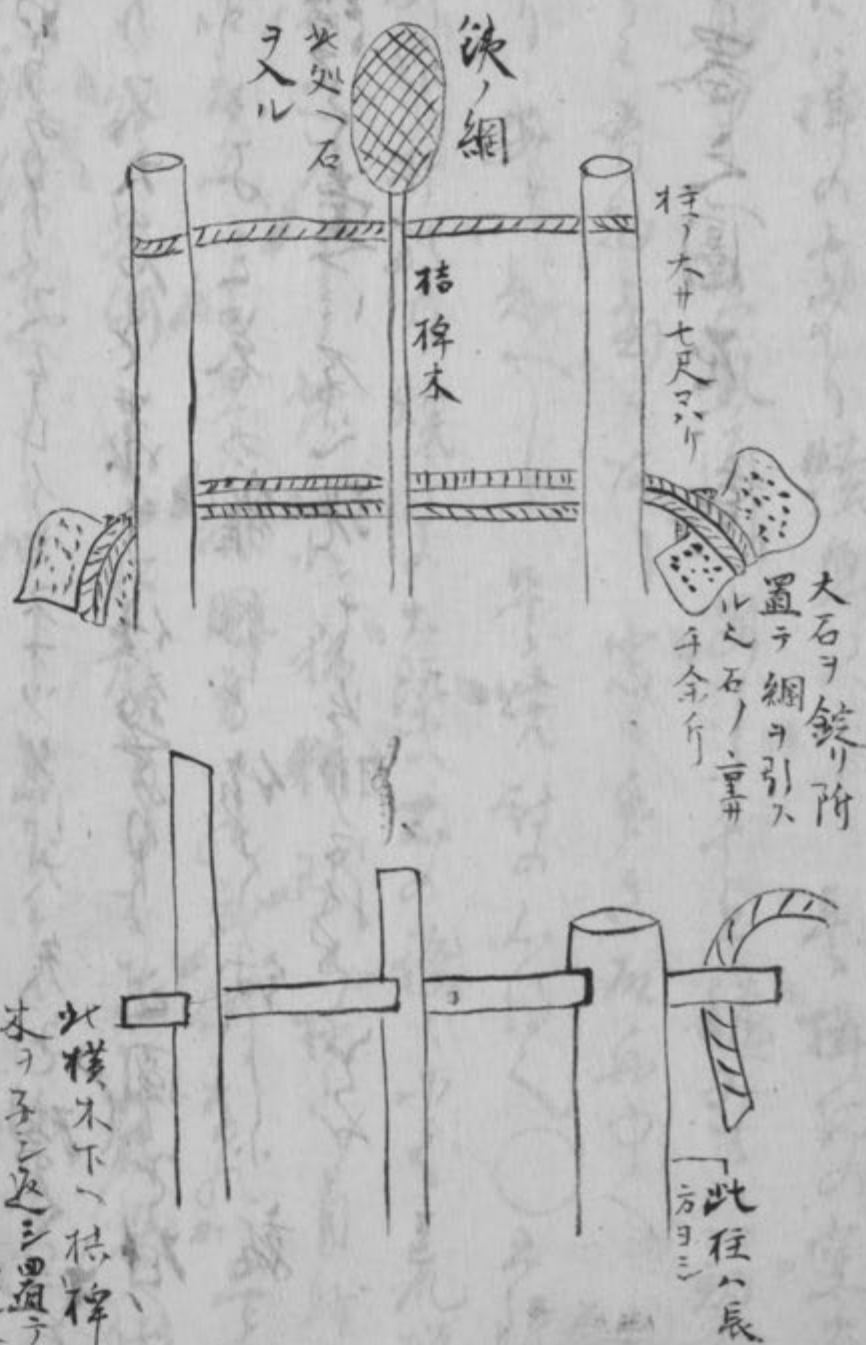
火一火移く
融船の客に
偕合せし所を
自

高に弛込へ
逆火縄子なる板此舟敷舟へ

押すく彼を掻く男ふ箱の茶煙を多く紫
に火移れに付大急ぐ火後引く煙出れ紫
の火氣成るに急ぐ急願船へ火移るを此箱
茶の別法甚大事なり○西洋船二艘、龍番
く修金と製さる此所火船の別法あり但
火船制作ハ初より一火船とも早舟二
艘より一山早の氷主一艘に十人お茶取
手火舟の首尾に長一丈半の如き沈漬
を首に二節尾に二節舟人此四節の頭めえ
ふふ二人の棒と掛け棒めえに小又利成煙の
根を枝ぬ此頭と火舟の首尾に二百節の早

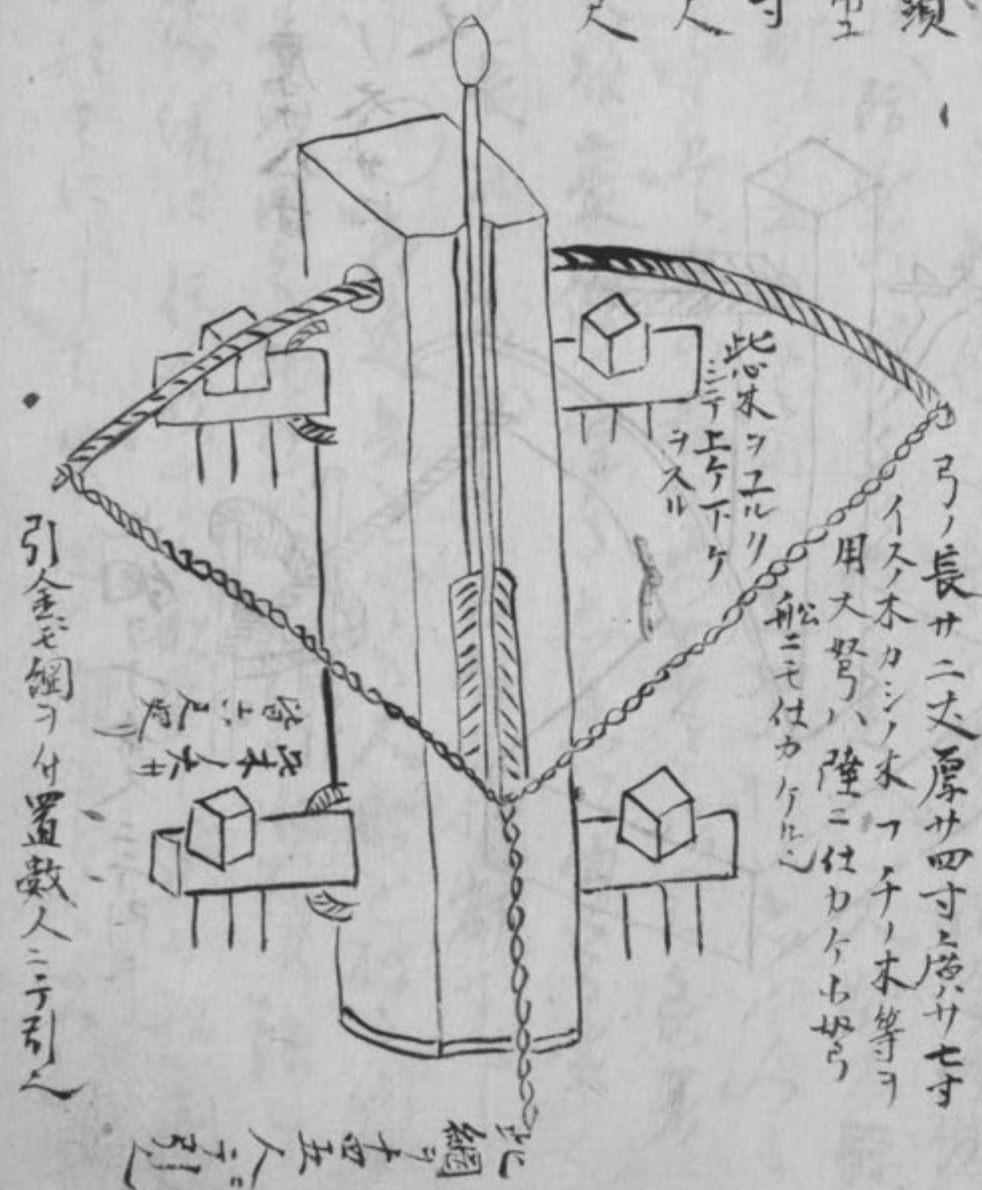
に二節を系ぐ火船より三艘がれ連続し
焼く歌船の棒めえを不押す舟午舟十人の
氷舟の四一人ハ舟と一舟く沈漬頭所の
大棒を歌船の船板人力を掻く舟急立便棒
一舟より舟あられ又二人ハ舟と一舟く
彼焼茶ととる舟火救舟に舟と物
おわに舟茶（舟と）一舟沈漬頭所
い舟舟と沈漬く一舟舟より七八節隔て茶
震動し怪我を相し舟西舟尾の舟舟と火
移れい舟箱茶焼起り舟と舟く歌船火舟
る○船中一棒火矢砲煙花の類と不たは随

石彈之圖



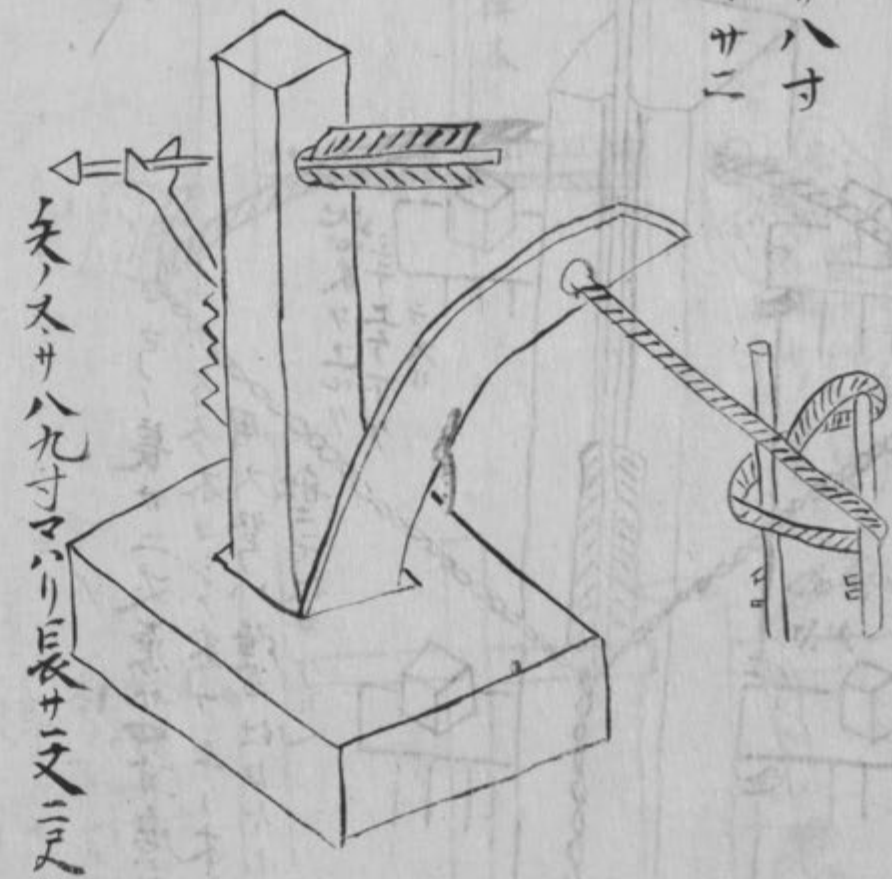
大弩之圖

碎クハ銀神頭
ヲ用燒ハ銀ヲ用ユ
ヘシ矢ノ太サ七寸
廻リ長サハ九尺
臺木ノ太サ二尺
二尺五寸



柱石之圖

此彈キ木厚サ八寸
廣二尺柱ノ太サ二
尺高サ二丈



○其に及第を 碑事ハ 上に記ふ 大流大なり 柱石
石條燒付等の 教條ノ 号と能く 教諭訓
士に 海軍 陸軍の 訓ハ 大概の是 ○大船を 驛
橋と 西と 割る 事ハ 其 用の 道功の 秘に あり 人
の 可なり 其 号の 盡ハ 出 事と 修む 良策に
し 英雄豪傑の 深き 志を 以て 功を 事
必 近 遠の 長 批と あり なる あり 創す 下
創す 下 ○此 道具と して 大 船と 破る 例ハ
是 近に 記す 以て 同く 其 功に 多 功の 水 戦の 法と
記 録も 流 流に 伝 授す 船 軍ハ 兵 少 船 國
士ハ 海 法に 之に して 異 國の 海に して 大 船

我小船といふは、佐藤の佐に、全に今、此、去、は、
 我小船といふは、黒、又、の、大、船、を、思、す、例、を、と、り、し、
 去、る、と、書、物、也、一、十、例、と、神、後、に、比、之、そ、う、も、
 知、く、我、後、に、小、船、同、士、の、少、林、合、と、あ、る、○、少、船、
 は、く、異、小、船、の、佐、と、り、し、傷、に、先、を、山、和、蘭、
 此、大、船、の、長、サ、二、十、并、也、と、知、く、我、後、に、一、十、例、を、配、
 す、一、大、概、而、小、船、ハ、長、サ、二、十、余、間、横、立、
 間、余、深、二、丈、余、之、小、船、の、割、是、多、う、と、り、し、
 此、船、に、四、五、人、と、書、れ、ハ、船、の、中、比、少、く、水、面、
 に、深、も、也、と、我、さ、う、と、り、し、余、一、也、之、船、は、
 一、大、四、五、人、深、ハ、此、船、一、丈、平、也、一、○、和、蘭、

院船角の船より甚く大に、
 なる、長サ廿四五尺、横六尺、
 尺四寸、小舟、
 流る、水の上に浮物、
 有り、
 暖に仕、
 十一階、
 大船、
 夕、
 と、
 花、

長サ二丈六尺五寸に人毎に此器と形亦此と
 あり。清履と名づる。履の制は下に圖す。取
 阿蘭陀船へ移るに品時に北角と名と船の腹に
 ちりし能くしとあり。此の履と船腹に臨みけ
 ると多しなり。是より好くともあり。
 早く船中へ移るべく、中位後舟へ移る五人之
 十人より人おしく、先此の器を船腹と名とく。此は
 此の器は方人なり。小船と二十艘より多く、大船の腹に
 一十艘より一四に押すべく、此の器は一回にたふし
 同に此の器は一回にたふし。此の器は偏より、此の器は偏
 此の器は偏より。

鋏履



此級ヲ以テ躋
ク、リケルコ

長柄ノ萼比喙



大船と舟の多し 此臨機を要す

五六尺ノ竿リヲ用

打鉤



此船に乘り戦士とる人

二百便の傍り用へ

傍り人入板子ノ下

左へ偏く只舵候持

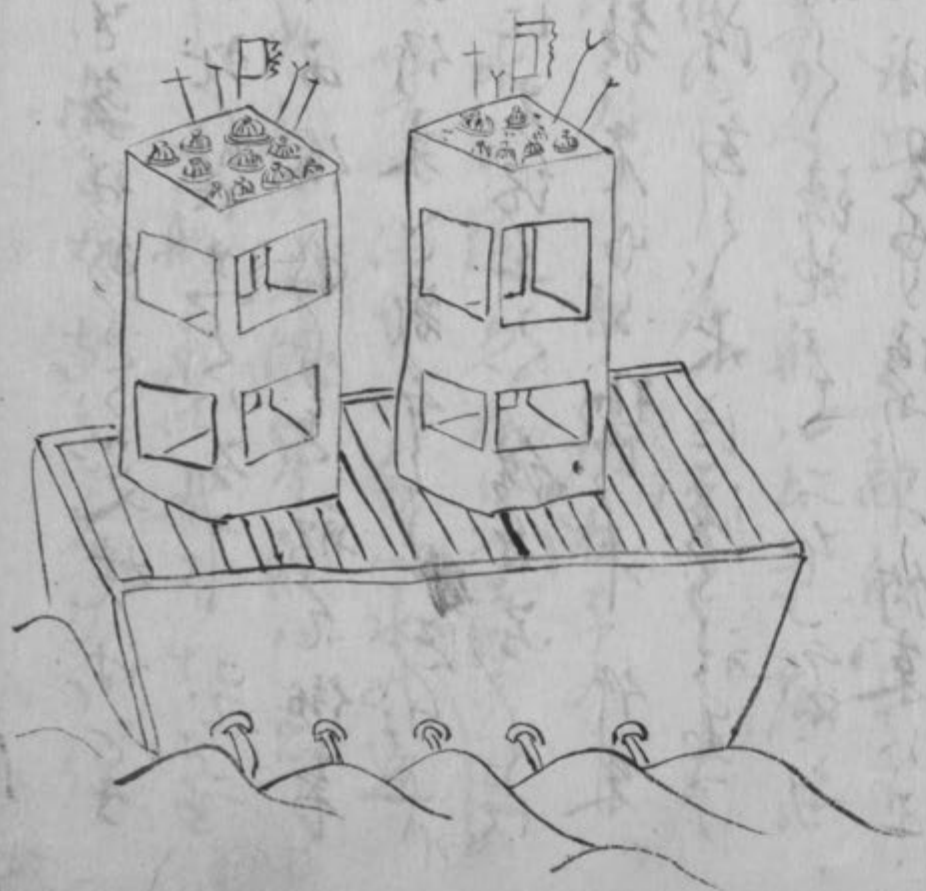
取身板子ノ上にて

右持而持ノ下知合

多致スヘシ

船ノ長廿五寸間

横ノ高廿二寸



○新東船あり 諸船も多しおとる又統計とす
とする 敵船付無くハ此船に上るハ有 是二
十艘と二艘と 一ハ佛船少く 船を佛事
るるれと割ハ小船に竹束と幾年しと云
かり年々 四半と云に之船少く 諸船
候と云く 四半と云に之船少く 諸船
ハ云々 四半と云に之船少く 諸船
を少く 帆を揚し 揚し 諸船と云 二半と云
切れて 四半と云に之船少く 諸船
不備 日あり 敵船を 竹束ハ三
自由と云に之船少く 諸船
切れて 四半と云に之船少く 諸船

第一 四半と云に之船少く 諸船
を少く 帆を揚し 揚し 諸船と云 二半と云
切れて 四半と云に之船少く 諸船
不備 日あり 敵船を 竹束ハ三
自由と云に之船少く 諸船
切れて 四半と云に之船少く 諸船
第一 四半と云に之船少く 諸船
を少く 帆を揚し 揚し 諸船と云 二半と云
切れて 四半と云に之船少く 諸船
不備 日あり 敵船を 竹束ハ三
自由と云に之船少く 諸船
切れて 四半と云に之船少く 諸船

夜越 働にすゝもすゝす
 首尾をくち船へ飛入たの時より
 船中 働のつとめ
 へ飛移る船中より早く船中を
 敵船の中と思ふ様になす
 戦士 或十人余の船より水主十人
 敵船へ寄付て戦士攀上り
 のれ五人の船より役立て
 取付と一船に十人用意仕
 舟より舟より舟より舟より
 波長れ舟より舟より舟より

七ノ八長船の船長ハ長ク船中ニ思
 下下 一艘ノ小船アリ 其本宛於そノ十
 艘中ニ五十ナ燃テ時ハ敵船九中ニ居テ明
 白無ク 船中ニ一ノ明とある此
 ナリ 後ハ明ノ人数と艦とノ明ノ後ハ船
 中ニ一ノ明と燃テ一ノ戦士と明ナリ 戦
 士も死ニ初ニ敵ノ決定と作リ 其は也
 可達ノ力アリ 編制ナリ ○少年
 救護水練地達六十人と乗セテ敵船ニ思
 寄水と潜ム 敵船ノ船底ニ穴と貫テ
 水と入リ 其ノ刑アリ 手ニ水練アリ

[illegible]

長廿一尺五寸筒堅

○ 支那教條ハ我小船と異國の大船と相劣
 然之上下一改ハ能教諭派諒方ハ遠

く歐羅巴へ押通るとも、後れとハる事あり
況んや此國へ來れり異國船より来るもの
上者なりとて下級賤なりけり又復空法を
能くしめしめしめす事あるべし ○異國
人我に對し心は多岐なりとて異國
ハ血氣に飽きぬ移りて奇術奇巧を逞
かにし氣を奪ふ事と勤むす可き事
曰士ハ其情も有り年あれども其志
不成人ハ彼奇術に心を盡し上れり
と茶水暖病と云ふことあり人の持前とす
血氣弱くありあり少面より及み少事なり也

少子輩に
奇術を
傳へられ
て

武の志用
うゑ、おふれ、千壽
州寄信

少志一
只一
向
切と
才一
又
以
無

心之奇術の仕度ものに曉る事

あふれんば名に
手寄仕と
名に地○火

[illegible]

中 天に 北
火 置 地と 北
火 置 地と 北

方り
○
里
○
中
天

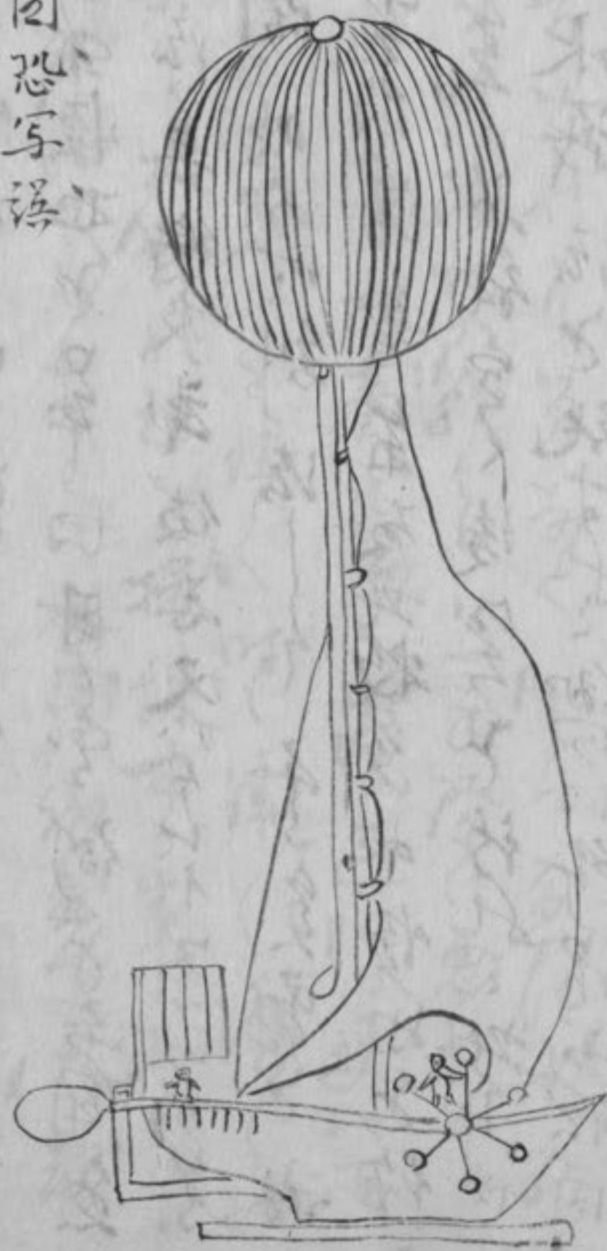
墨田古亭 凡 常考 自在に安とる 如き

[illegible]

子
人
年
月
日
一
二
三
四
五
六
七
八
九
十
十一
十二
十三
十四
十五
十六
十七
十八
十九
二十
二十一
二十二
二十三
二十四
二十五
二十六
二十七
二十八
二十九
三十
三十一
三十二
三十三
三十四
三十五
三十六
三十七
三十八
三十九
四十
四十一
四十二
四十三
四十四
四十五
四十六
四十七
四十八
四十九
五十
五十一
五十二
五十三
五十四
五十五
五十六
五十七
五十八
五十九
六十
六十一
六十二
六十三
六十四
六十五
六十六
六十七
六十八
六十九
七十
七十一
七十二
七十三
七十四
七十五
七十六
七十七
七十八
七十九
八十
八十一
八十二
八十三
八十四
八十五
八十六
八十七
八十八
八十九
九十
九十一
九十二
九十三
九十四
九十五
九十六
九十七
九十八
九十九
一百

陣より此船用ちりし中にも此船別而
 志す所の船ありしは又多し人もありし
 若し年上と童湯船を以て帆柱の上に
 互に代をとり換へて氣漏れて船底を
 弄下し趣も怪れと見馴る人に見え
 づ腫病と云ふ之れ然るは是も人と
 等人物に志しし事と船の交りし
 法年にもし

理圖古突悉吉不之圖



此圖恐写誤

し軍船と出さす事之此後永く玉に
決定あり又山國水邊の民利あり事あり
一定此事ハ之なり大畧に心得居る國
士此堂に臨下又是に依る高堂船
軍用の時ハ大小船ともに悉く玉に之と
る事あり難き官に定む○軍船
ハ大小船と組合す事ハ大ハ兵と兼く
船にありと兼く小ハ大船を助く奇に
備と兼く○大船小船利と辨す
時ハ大船は宗あり小船は宗あり
にあり飛鳥其を偵察と略すにあり

るを敵ハ小舟と書く事あり大船を
敵ハ宗あり大船ハ大船に利あり
之○小舟は利ハ船と兼く之は事
にあり大船を助く奇に備と兼く
魚の援にあり二三十日此大船と仕
く大船は宗あり○吾國にハ樓船と兼く
此に三宗此船と構く船士と兼く
水戦をなす事あり此船ハ水戦に利あり
と兼く之は事あり今迄樓船の制あり事あり
此に之とも兼あり船師制作あり交事あり
張るハ樓船非ずとも樓船の心持あり制作

多時ハ水難ナリ利々事制ナリ ○樓船は

多に及土舟とてに務と用く事と防

へり別々大將の府と稱候稱ふ人居所

ハ慎み圍但樓船ハ武弁の自由制ナリ

ナリ ○米穀塩俵ノ類船に載りて積

へり大船に米薪ノ類と積にハ一重米一

重薪と吸くハ積入○船此早緒ハ頭目ナリ

船に切れぬ事○稱候ハ切ると撰へり取

諸用ナリ此船ハ五倍と稱ふ事ナリ此

ハ船と定へり 船ハ冷と稱ふ事ナリ此

ハ西稱ハ冷と稱ふ事ナリ此

ハ船と定へり 船ハ冷と稱ふ事ナリ此

ハ船と定へり 船ハ冷と稱ふ事ナリ此

ハ船と定へり 船ハ冷と稱ふ事ナリ此

ハ船と定へり 船ハ冷と稱ふ事ナリ此

ハ船と定へり 船ハ冷と稱ふ事ナリ此

ハ船と定へり 船ハ冷と稱ふ事ナリ此

ハ船と定へり 船ハ冷と稱ふ事ナリ此

ハ船と定へり 船ハ冷と稱ふ事ナリ此

ハ船と定へり 船ハ冷と稱ふ事ナリ此

ハ船と定へり 船ハ冷と稱ふ事ナリ此

ハ船と定へり 船ハ冷と稱ふ事ナリ此

前時ハ熊手浦を以て下廻り着海へ
 一 下廻り圓ハ前に出づる ○ 船ハ
 行つても 東へ向ふ船に脚を 一 着
 平日弓銃砲を数玉合に射る 船
 を揚ぐる 時ハ水ととも飛込矢の備はる
 一 船に帆ととも大帆に走る
 時ハ乗込する 船に序ととも水に引
 とる 乗込する 船に序ととも水に引
 の速速なるを制して 速速なるを
 孰とも速にハ船の速に増速に成る 速
 船に用意は成る 又砲火

火を敵艦に擲入へ
敵艦より火を此船
へ擲入る時、此器に
救返す。夕
此器ハ針金と
振る子と有。此器



鍍夕七ノ圖

○ 砲 此 所 へ 時 々 砲 撃 を 二 三 挺 艦 へ 行 来
に 至 る 時 々 砲 撃 を 二 三 挺 艦 へ 行 来
の 事 ハ 皆 々 毎 日 々 々 尋 常 向 々 猶 精 神
に 至 る 時 々 砲 撃 を 二 三 挺 艦 へ 行 来
に 至 る 時 々 砲 撃 を 二 三 挺 艦 へ 行 来
に 至 る 時 々 砲 撃 を 二 三 挺 艦 へ 行 来

傍に船入す。○必平水にする事あり。出船時、船も心に船魂と云ふ。不修仰来とも少なき。そ人心を止む中、種々の○剥木行板マキハタ漬、煉石灰等、船毎多用意あり。舟を漬炮よく打接れり。与ふく塞く。与はるは具へ剥木に綿或ハタ類をまゝひき合て大筒より船を打接れり。時々此物を押入る。与上板と附石灰ホテ塗塞く。皆一時の急造と成る。一葉く、水邊中、此役を定む。

14. 平系に
5. 年
多れ



出船時船主に心取魂と云ふ人

子

不修仰采也必榮乎一人心之出於

中
製種錄乙
○剥木行板
之
父
漢
礎

煉石灰等船多用急水舟上漬

炮以之打接水乃能去塞去乃能去

具之劑本に綿或ふキハタ類をまゝいりて

て大旨よく船を打援せしむ時要知

と押入く平上へ板と附石灰にて塗寒

く
一
時
急
延
と
救
ふ
一
彙

水邊中冓役之定

○ 舟の舳先を蹟を以蹟小張りて如歌船此横

暖へ糸を板を糸割るへ
○百石積

地中に水主地中より此役を定む

○ 船の軸を張固く船の横腹へ

柔然之板と柔刻下
○百名積地似

水多也 三千五百人 然

勝勝八十挺より不足す事多し余は

是と唯々之を脚圖と小荷物

と積奉心好可年
船中此相國ハ方

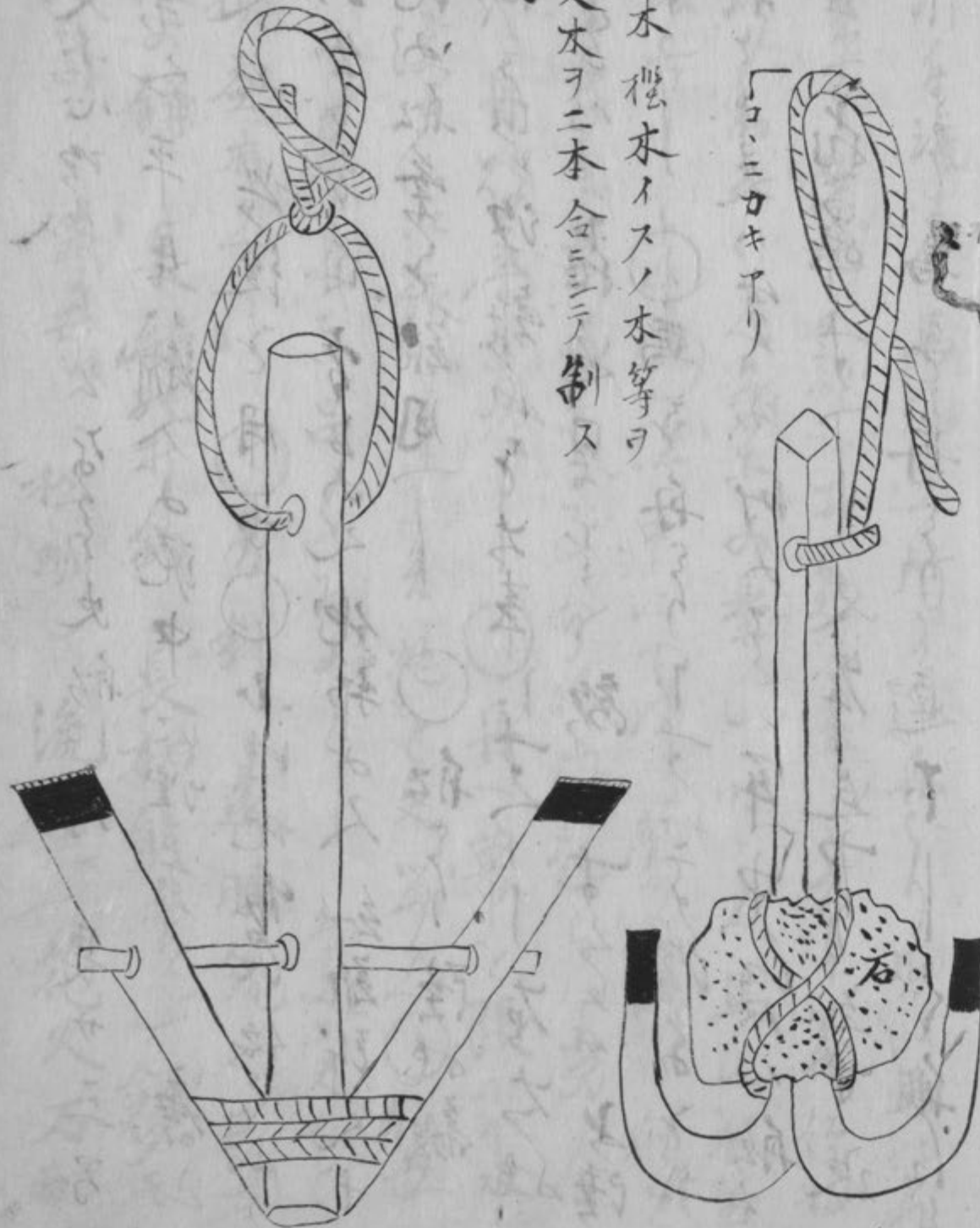
報ハ風波小夢に紛て波ハ至事有るに

夢に、礪を用
取、一流、皂花、火、花、類を用

木 錠

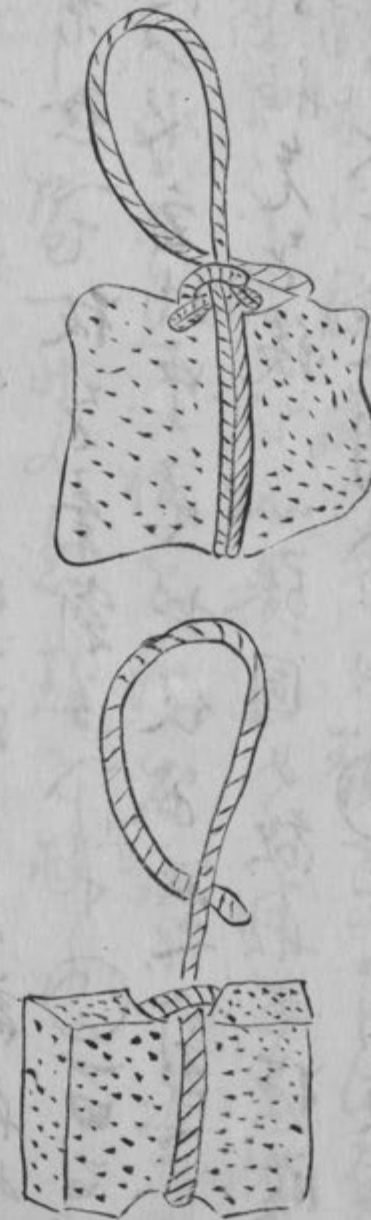
樟木 櫓水ノスノ水等ヲ
用又木ヲ二本合ニシテ制ス
ル

コ、ニカキアリ



石 錠之圖

○ 出多ク此等ノ多クハ錠と切ク捨
に船毎に錠と余ノヲ用意ス
を切捨下スル時一ノ事ナリ
用也
石ノ錠
但錠
石ノ錠
石ノ錠



大小心珍身と云なる多火船に用ゐる長廿三万
 余之平生ハ潮入の泥中に埋まると唐山
 人多此役を用由○不地地盤に依る此
 の出の方向方よ之他邦の人知難所とす
 地ハ船乗と難用一○船より陸地敵一
 抵るに沙離れと大幸にす一在太地
 手先石花遠果少く敵とすくろて上陸
 す下○馬と舟よりすにす諸事と我
 れも又ハ實成竹の之軍中以ハハ船
 岸ハ花昇す下又岸迄中り立す水
 中より馬と舟より進下一く舟に

引舟流し馬此より所より舟より亦に馬に花
 乗る陸地ハ敵一すある事より我々
 此勝とく之を不の業も時人馬に教全
 致し一と○洋中にてゆり繋の時に船を
 召する無へ繋るるゆれ此起らハ完全合
 く舟が事ある下○舟一幕と張ハ水
 に浸る船に張一矢炮と文あり○船中
 に用意す一と品く取よ一又又又
 損益有下○方針 遠眼鏡 長
 柄の鏢 長緒此打釣 長柄熊手 鉄分
 大筒 弩弓 松明 流星 花火石

難くとも云ふ可い。白河湊川に等抵るに
 方更に船を問ふに、主として向をられ、火
 船は忘れ有り。○款船、船に六十多あり、廿
 目迄は筒を以て、款船は横船、横腹水に
 入多を打破て、船中人水のみ船にす。十
 此働ハ小船哉。半町要は働人。○大筒
 を放奉。小船にて、火船に幾位も
 仕舞ふと見合くと云ふ。○
 魚イサナ 但小船も二三十月の一、位仕
 舞ふ。但百石積の船に五百目仕
 舞ふと云ふ。○前に云ふ

一艘少く、移働をせよと云ハ一箇の荒帖
と云ふ令舳の法ハ或二三艘又ハ五六艘を一
組として、追逐難す。互に等正の御と波
折の態をとり、折廻る。乗板へ。但味力
の船に乗移る。一艘く、舳の両合を以て
舳れ来とも、舳にを味方、舳二三艘多く
戦ふ也。○一艘の偏茶ハ舳に云一
やく三五人乗れ、舳より舳に五人之水色
十人、中一人舳の長、定一艘の表と
司を志す。物部者廿五人、舳六十人ハ

十人、漢炮十五人、弓にて敵船を見、八歳く
可丁、くわ、重なり、は漢炮、く、く、六人、水、く、人
み、物、さ、の、書、と、捨、く、打、新、態、手、さ、と、可、然
敵、船、と、引、寄、居、く、手、時、残、代、我、さ、飛、近
具、と、捨、く、敵、船、へ、棄、物、く、手、捨、の、時、負、と
変、す、く、六、人、枚、取、く、此、法、不、消、く、一、佛
前、と、定、く、
○敵、船、と、近、く、八、敵、船、水
主、と、打、く、
敵、船、に、棄、物、く、く、く、く、
早、緒、と、切、く、
○平、々、の、強、速、に、即、ち、是、に、
く、く、に、擲、擲、俾、等、の、遠、近、と、教、知、く、
く、く、玉、く、く、く、敵、可、く、く、く、此、の、水、を、目

無、く、討、た、く、く、手、時、我、士、勝、勝、の、事、に、熟、く、
は、時、に、水、を、と、く、残、打、教、く、れ、く、
形、の、近、退、
等、不、苦、く、く、く、く、人、此、教、水、戦、の、要、法、なり
急、事、
あ、つ、れ、○古、船、に、候、を、二、三、所、構、置、く、と
敵、國、へ、手、を、交、
取、に、漢、炮、と、入、れ、候、に、刻、
意、く、く、手、刻、一、漢、炮、十、挺、く、入、り、て、手、代、
一、人、前、の、更、方、と、為、敵、船、一、近、付、く、く、人、く、更、
主、前、の、漢、炮、十、挺、と、名、張、く、
敵、く、打、す、
く、く、く、敵、船、と、不、可、く、く、
但、自、余、此、を、我、
主、ハ、船、く、く、手、に、此、御、す、く、く、
く、く、れ、能、敵、
く、く、切、く、此、御、を、く、く、
敵、と、知、り、く、く、

ふり事なり、解凍北境より、て理非
とて、此千端あり、お討事あり、犯す
八能多新 ○禁く、船の付別、も離れて他所へ
繋事、ふれ、宵く、ふ、船同新 ○船、
と、そ、も、曉、ふ、糸、船、と、ふ、船、
ふ、及、得、ふ、水、色、も、新、等、も、罪、あり、
歳、く、船、似、と、追、討、人、敵、謀、に、得、れ、功、と、お、
す、本、あり、必、珍、ひ、名、事、あり、れ、為、珍、ひ、
敵、船、と、名、道、ふ、六、千、船、同、新 ○湖、内、く、大、
業、過、く、ふ、心、と、用、く、ふ、乾、す、
ふ、心、く、大、お、討、時、八、千、船、同、識、と、別 ○首、
名、事、と、心、に、お、討、船、同、追、討、と、色、と、す、
此、船、と、首、と、ふ、ひ、く、敵、船、と、名、道、と、付、
千、船、同、識、罪、あり ○船、中、に、名、事、と、禁、
犯、す、ふ、八、罪、あり ○船、具、と、名、と、罪 ○酒、
を、飲、或、賭、の、賭、員、事、と、禁、す、犯、と、罪 ○船、中、
に、兵、糧、八、千、船、と、名、と、禁、す、犯、と、罪 ○船、中、
に、名、事、と、名、事、と、名、事、と、名、事、と、名、事、と、
六、同、卷、より、片、道、此、教、余、く、海、内、の、水、義、
の、法、八、は、なり、と、名、事、
此、と、水、義、と、名、事、
月、と、犯、す、犯、と、名、事、
水、戦、第一、
要、藥、也、

○と色より暗く六五丸 ○人成り難く
あれと云ふ 古に倭にふくまふと云ふ
我よりに引られし心持はるる唐和蘭砲
より此の砲号又と云ふ此の砲は倭人此の
名に記号又臨時の情状あり一多事
あり ○是の船を呼ぶ 船と云ふ又略し
今船に名はるる事何と略と云ふ今
地と名はるる事 日本に在る船を
杉板と云ふ ○是の船の三役人ハ船を
官より此の船の役なり ○阿蘭陀
人船を呼ぶ 船と云ふ又略し

云和蘭砲船此の役ハオツフル
ル船 オツフルスケエルコン 櫻計
頭役人 ○初發より 船に引られし
今 日本に在る船の調領新に名を
取新の船と云ふ西此の船を略し
は古に引られし又蓋械を具ても
又蓋に引られし又蓋を能く合はるる
操練と云ふす而後始と云ふ此の
船は軍に陸戦なり 操練と云ふ人
は 船に引られし 況水戦の船
船より一所より引られし

是非に練操多くくふ叶ふ趣あり水戦は
操練ハ操練此内ハ又大切なる操練集ト
必由なる事ナレ要妙ニ
白に操練此に流氷は血戦に託く制す
あり能く彼を交を吞込く操練血戦
二ハ多々今と妙トす
水戦ハ義と述
六戦畧陸戦
十六巻を以て
十六戦ハ國の大
戦と示す意に
する事ナレ

海國兵法卷二

陸戦

○茲に水戦に今得ハ陸戦此法と述
と述ハ先戦法ハ戰國の法也日本
諸流の戦法ハ大概流戦者ハ長柄
或ハ四反り立く六十方より
中ハ流戦者ハ拵合ハ十四五方に流戦
拵合又ハ長柄拵合ハ鼻突に集るこ
或ハ此勝負ハ切頭ハ概定有之南村ハ此
ハ世人多クハ此切頭ハ合戦ハ次有

なる事と云ふ人も多かれと接戦せむに
 是れに混れり事にも少く終へ切腹と
 事なり敵に如き六人に狼狽し事なり
 一 我々軍は之を云に有り之を云
 事なり人氣を奪ふに有り之を法六ツ有
 一 紀元玉撃人傷と碎にも此術を馳す
 一 敵方を流し傷多しと猶も之を用ひ来
 る時ハ玉銃にも流し傷多しと又猶も用ひて漢
 炮と敵を傷く押懸六玉碎に如く又猶も
 漢炮の如く射す接戦と押懸六猶も無事
 又此道具と稱す傷く押懸六時ハ味方に如く

[illegible]

云事人○手洗物と云是も洗と一西に案
其く洗物仕に也堂有之二十人二十人
乃三百人も撰く各六方大捧大難
と持也至歌三指四斗に成く持
早く之三至之に歌三三四斗捧
踏歩に時持又儀より件此仕士小人
一口大人数なり二口も三口も
至然に歌中一入綴持五得に切立
後習るる儀と地立之意味に花及生
手時人舞にに強に字とそり玉
持と一西に案其く此乃其の
大筒と教

備置中筒と四交路に折廻るる歌間
持持一此時有各六太筒一と
舞之歌此儀中一太筒一太筒一
折廻るる歌此儀中一太筒一太筒一
是は舞之至二至三に切立之
其時ハ破多疑なり一太筒一太筒一
教此多幕に下一太筒一太筒一
人ハ一太筒一太筒一太筒一太筒一
其教歌と碎に此事ハ本旨録
用一其儀一其儀一其儀一其儀一
此卷に出たり先合す一○持矢

去に敵決死と雖もあはれに多く押進する味方
と討するむるをみればあはれ射る者も人
多し矢射し少懐疑矢に射て敵を
すくめて活炮を放さるる事あるは時
を失ふも後に入れば此は矢射し
一は御もて活炮射し面を射るも
に和しす信なり○余前と云ふ敵は具と雖
く値透るるを多く押進する時味方に
あはれしと少人殺るる時尋常は
軍より心算せしむる所は余前と云ふ
別な馬を多く二五七三騎あり六十騎

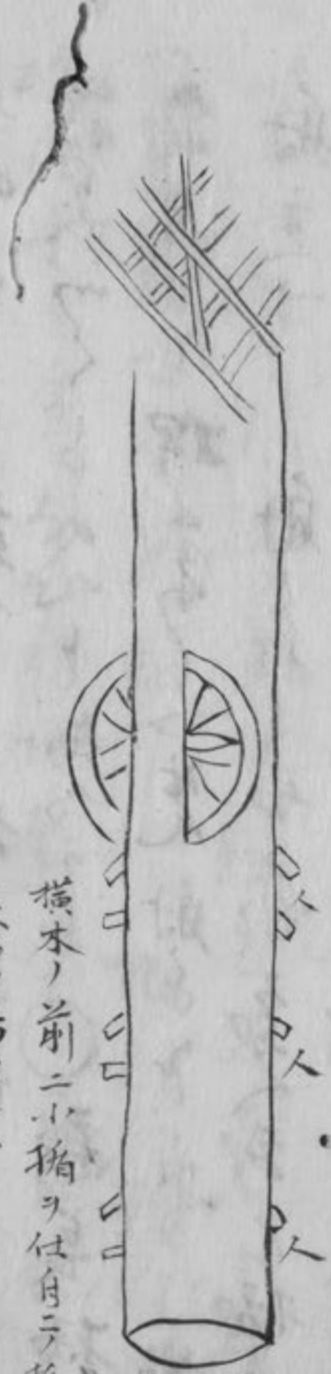
のふり騎或は騎射も若し大事に戦ひ
ありし余と塵芥より多く戦ひ
一念に軍神と勅清奉く前後に願ふ
二五三に敵我傷中へ余と云ふ
余兵もやとて馬に入信に之等
騎馬の二十匹と五十匹も一隊
隊の中心へ余と云ふと一口入と云ふ二
隊に分くゆれば余と云ふと
入と云ふと敵も馬を入るに人殺し
方へ余と云ふと余と云ふ時は
所敵さるもの

○車扱しゑ下に圓す。而も招輪の長を
と擧ぐ一車と六十人ぞ推之此車と倭
軍は十車或ハ二三車も推く陳亦
押出。詔曰十男斗よはる近ハ靜水と
可也和を教れおまに隨く吾二女之に敵は
隊中へ押さへ一人をも馬とも抑倒す
又には續く武士切込討ハ勝と云事終ふ有
ち此車の振本能縦横なり

弁鎗を亂散に捨てし

此車ヲ推シテ足輕百姓
勇丈ヲ撰ムヘシ

本ノ長サ
三間



横本ノ前ニ小指ヲ付自ニテ推人ニ
天石ヲ防カシム

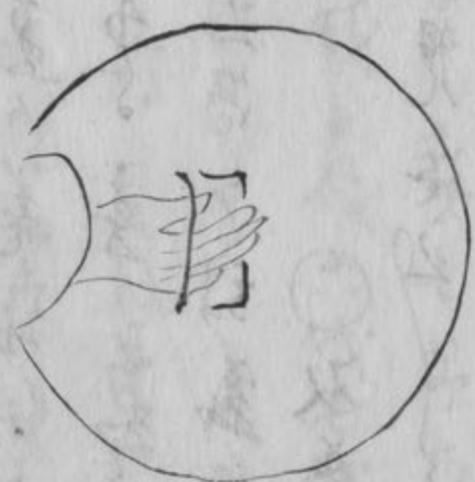
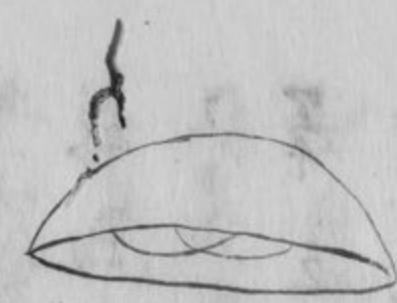
車輪八四尺斗故二作合竹鑿人面入毛中各口内二結付三

○敵より馬入と爲時ハ早く場所ハ歩回
馬の流るゝと薙下（此の如く）使人を走れと心
敵よりつゝも人々多し
○敵長柄を殺
あつたに押さへ先射をせしむ散
射をすし射れくむ多し或は援連と云
二云云に托せしむ手槍の暗角合衆抑姓の諸
手槍より敵を破る○又外は吳國と東魏に戦
はく車と馬に率より車地と云ハ生牛皮
を以張固し車中に十人斗つて多し敵陣へ
馳せたり又には獲る騎馬も多し率も突如と
敵を破る術あり又ケレイ又ギフツケに小衆は二

勝つ四つと云ふはよく張固ありと敵は
其に負せしむ中に戦士二十五人云々人々
は敵陣へ馳せ河より少少の事ハ河師の
機情より此地と云ふ敵と云ふ敵を制し
て多し
鬼角合戦は遠ハせりなる
つゝと云ふは暗と云ふ所衆ハ
○敵と討陣し戦をせしむと云ふは
ハ先戦士を見まし地形ハ戦の作あり
晴れすし事ありれ地形九卷目に記し傳を
押出すハ率よりすし事なりれ地形ハ
見と云ふは陣ありと云ふは後ハ押出す

一〇近世備と用がられ之は一戦に
 此を合戦の仕方なり 戦法に如く之
 敵を其法に海軍 今戦の法を
 海軍と云ふ 一際之を成るるは
 以て之も戦を 甲乙を 已むる戦法に
 一戦を 一戦と云ふなり 取 戦法に
 多人の仕方に如く之を 外は同ハ
 只戦を 戦と云ふなり 今戦に其
 多し ありけり 戦法に 又 唐
 法と云ふなり 戦法は 戦法なり 又 唐

和蘭 戦法に 今 戦法に 戦法に
 戦と云ふなり 戦法に 戦法に 戦法に
 戦と云ふなり 戦法に 戦法に 戦法に
 戦と云ふなり 戦法に 戦法に 戦法に
 戦と云ふなり 戦法に 戦法に 戦法に



唐ニ藤牌ト云 和蘭
 ニシテト云 花子ニ是
 ラ持テ而シ 防キ石ノ
 手ニ劍ヲ以テ 敵ニア
 タルニ

○近世大箇如多く、種々奇例ありと之
 一、昨々、ある筆端に、ある事を知り
 戦戦に、ある事を知り、兵と提つて
 上更し、ある事を知り、兵と提つて
 軍主なり。○又、人数と推し、
 時ハ神に御見を、能く御見を
 見ゆり、神に御見を、能く御見を
 出す。○又、人数と推し、
 生ハ是に、神に御見を、能く御見を
 人知と、神に御見を、能く御見を
 人知と、神に御見を、能く御見を

○近世大箇如多く、種々奇例ありと之
 一、昨々、ある筆端に、ある事を知り
 戦戦に、ある事を知り、兵と提つて
 上更し、ある事を知り、兵と提つて
 軍主なり。○又、人数と推し、
 時ハ神に御見を、能く御見を
 見ゆり、神に御見を、能く御見を
 出す。○又、人数と推し、
 生ハ是に、神に御見を、能く御見を
 人知と、神に御見を、能く御見を
 人知と、神に御見を、能く御見を

に余り事あり物あり之を然る國に之を遣信
て根斬葉とす見ゆ有財穀疎く
遣信く我負る國面疎削は馬其の
仰とそく知く ○道と道に心は香
許總齊く是並ふ不死士卒後發とそく
く道とそく此財走に下す重則なり道
事ありれ多し道は去るを返すに道とそく
軍す事ありの信又許總と此是並ふ
ふ正兵器は手拾く道とそく真入財走之遣信
く折果す ○突敵り強き敵といふれ
重則く或は信と返け或は去る

討たるあり然る敵將心は去るそくあり
重則く此手に手ありそく之に以て重則く此信
あり許總と此兵器と拾く重則く此信
去るそく敵將知る信は去るそく此手に素
るありあり然る此類の信は此信發にあり
○己れ重則くす時そく此信は去るそく此手に素
信とそく此信は去るそく此手に素
重則く此信は去るそく ○重則く
信とそく此信は去るそく此手に素
信とそく此信は去るそく此手に素
信とそく此信は去るそく此手に素
信とそく此信は去るそく此手に素

ハ強如ク少教をうゝるゝと申候也
敵入様を入す ○川と流。敵と申候
と申す 申候也。敵も申候也。入
りて可と云ふ ○押入の敵を討つべく討に
これ団より二ッ六達中一書く討三ッ六
屯場へ着て未刻に戦ひて下り討に六兵
糧をもす。処と討争ハ所是れ夜と討六ッ六
五津の翌朝未明に討争し。是時軍は
ち進み ○將軍、時々此屯場に立寄ると二
寺も三寺もあり。至る諸地大層なり。去りと
傳へ給ふ ○四早半。午と申。釋信堂跡

の封を為し、馬結芥葉に火と舟く
張るは是に於て追放く、歌の言と焼
石の荒れ作細と陣氣に神あり
歌人といふとわらう、あそびつる事もあり
此類は事兒戯に似せられども平切なるり
也、又次、制作丁午。○時空にまゐる
小駝落車と古名之押知、車ハ張なり
り、清絶たる江守りるあり、歌押来とも
車は傳れく、近頃より之を吟味ゆ、今
をえんす、一切音、時、歌と破りたり
也、此類は事爲歳年ともあり、若人

ナカニヤル

ハカ電 手筆を制作して水鏡に利を
 得るるものなり 吾良将の一時の謀を
 出づる事と為す
 ○蘇杭戰場を
 小竹のちり 鑑軍 二人と一組と
 して二組も之組もけり
 人我今の攻め又ハ鑑軍決別 鑑軍も
 死傷し 吾將人となり 吾ハ鑑軍となり
 鑑軍所合す 吾と鑑軍又ハ鑑軍 吾
 頭此外に鑑軍あり 吾ハ一入 沙野
 くと 鑑軍に所を入る 吾ハ鑑軍あり
 鑑軍あり

八
二

八
二

11

Handwritten text in vertical columns, likely Japanese or Chinese characters, covering the right page. The text is faint and difficult to read.

